

ソードアート・オンライン
～彼こそが王～

rocar

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはソードアート・オンラインの世界で、後に『王』と呼ばれることになるプレイヤーの物語。

本来は臆病な男が、ある騎士の意思を継ぎ、希望を演じ、絶望を防ぐ盾となり、『なりたい自分』へと至る物語である。

??注意?? タグで「オリジナル」が入り乱れている通り、SAOの世界観で自分がやりたい展開やストーリーをぶち込んだ作品です。

温かい目で見守ってやってください。

目次

プロローグ	1
第1話 盾と猪	6
第2話 悪魔名の騎士	16
第3話 離別	24
第4話 眠れる森の美女？	35
第5話 死別	44
第6話 鼠のアルゴ	54
第7話 忍び寄る悪意	63

プロローグ

景色豊かな平原を、四匹のモンスターが歩いていった。

シルエットは小さな人形であるが、犬のような耳を生やし、鋭利な牙を揃え、片手には物々しい小振りの剣を持っている。

コボルト、そう言い表すのが正しいだろう。

四匹のコボルトは行くあてがあるのかないのか、ふらふらと平原を闊歩している。

そのうち最後尾の個体の胸から、ぞぶり、と細く尖った剣が生えた。

いや、生えたのではない。後ろから突き刺さっているのである。

コボルトがまるで苦痛を表すかのように唸ると同時に、剣はコボルトから引き抜かれた。

次いでコボルトが後ろを振り返る。その彼の目に映ったのは、自らを押し倒す円ラウンドシールド盾であつた。

土煙をあげてコボルトは倒れ込む。起き上がらせまいと、その矮軀を上から押さえつける円盾。

円盾の主は深みのある金の髪の男であつた。

男は無言のままに盾とは逆の手で持った細剣を掲げる。

鋒をコボルトの額を向けると、残忍とも言えるほどに彼は滅多刺した。

「ギッ、ギヤア、ガアッ……」

断末魔を最後に、コボルトは光の粒子となって砕け散る。

この世界では、設定でない以上死体というものには残らない。

それがモンスターであれ、この世界の住人であれ、自分であれ。

男が一息つき前を見ると、残りの三匹のコボルトがこちらを睨んでいた。

仲間を殺された憎悪からか？ いや、そうプログラミングされているだけだ。

すべてがデータである。

空も、木々も、モンスターも、剣も、盾も、鎧も、そして自分でさえも。

ひとつだけ、データでないものがあるとすれば。

それは、自らに宿る意志だけであろう。

「……来い」

低く、彼は呟いた。

◇◇◇

——これはゲームであっても、遊びではない。

そう言ったのは、この美しき世界を作り出し、そして外界からの一切の干渉を閉ざし

た茅場晶彦である。

世界の名は『浮遊城アインクラッド』。

一見して物語にでも出てくるような現実離れた幻想的な光景で溢れる世界だが、異世界でも夢の世界でもなく、むしろ現代の技術を駆使して作り出された仮想空間である。

この世界が、多くの剣士たちが命賭して戦う舞台なのだ。

もつとも、その剣士らにしても当初命を賭ける予定はなかったであろうが。

浮遊城アインクラッドを作り出し、そしてそれをVRMMORPGというゲームの形で世に広めた茅場晶彦は、間違いなく天才であろう。

しかし恐ろしいことに、彼はその才の裏で狂気を飼っていた。

ソードアート・オンライン。彼は開発したゲームをそう名付けた。

そして彼は、あろうことかソードアート・オンラインの世界を現実の世界から切り離したのである。

ソードアート・オンラインに参加したプレイヤーを巻き込み、プレイヤーたちに明確な死の条件を与えるという手段^{ログアウト}で。

本来あつてしかなるべき脱出方法はない。

さらにあらゆる蘇生手段を奪い、アバターの死は自らの死を意味する。

つまりゲーム内でH^{ヒットポイント} Pが0になれば、本当に死んでしまうということだ。

現実世界で他者が強引にプレイヤーを仮想空間へと繋ぐナーヴギアを取り外そうとすれば、プレイヤーの脳は灼かれやはり死亡する。

以上のことを、茅場晶彦は全プレイヤーに通達した。

そして、次に完全なる絶望に覆われた訳でもないことを説明します。

アインクラッドは全100層からなる浮遊城だ。

無論プレイヤーらが当時いる場所は第1層。スタート地点である。

そこからモンスター蔓延る迷宮を突破すると、次の階層へと至ることができる。

それを繰り返し第100層を突破すれば、即ちゲームをクリアすれば生き残ったプレイヤーは全員無事に現実世界へと戻ることができるのだ。

それを一方的に告げ、幸か不幸かプレイヤーたちを現実世界での姿に戻して茅場晶彦は姿を消した。

次に訪れたのは、プレイヤーたちの阿鼻叫喚である。

罵声、絶叫、怒声、悲嘆。

日本人にしては目立つ金髪を持った男も、沈黙こそすれ内心はその例に漏れなかった。

「……………会社になんて言えばいいんだ……………」

呟いた言葉は、状況にすぐわぬ呑気とも言える言葉だった。

人が予想だにしなかった絶望に呑まれたとき、咄嗟にすぎるのはもはや遠い存在となつてしまった日常なのか。

彼、たらぼな よしなか橘義仲はこの時、ただの会社員であつた。

そう、今は。

彼は知らない。

『シヴァ』の名で多くの仲間を引き連れ、そしていつしか『王』と呼ばれるようになるなどと。

第1話 盾と猪

なぜ、なぜ、なぜ……!?

ソードアート・オンラインが狂気の世界へと変貌して二日目。

義伸——いや、この世界ではアバター名である『シヴァ』が妥当か——の頭の仲間を埋め尽くすのは、ただひたすらにパニックと疑問符である。

もう茅場晶彦がデスゲームの宣言をしてから10時間を超えた。

にもかかわらず、現実の世界からの音座他はまったくくない。

だからと言って、彼にはどうしようもないのだ。おとなしく、とりあえずは安全な『圈内』である始まりの街で救援を待つしかないのである。

だが——

「お、俺は外に出るぞ！ 戦って、レベルアップすれば……!」

「正気かよ!?! 死ぬかもしれないんだぞ!」

「わかってる! だけどあの狂人が平気でモンスターが圏内を突破してくる設定に変更するかもしれないだろ! それに、もし、このまま助けがこなかったら……!」

男の叫びにも似た声に、ざわざわと周囲がどよめき出す。

それは果たして無謀か、英断か。

シヴァには預かり知れないことであるが、男と同じように街の外へと足を運ぶプレイヤ―も数人存在した。

彼らの行く末に死が待っているのかはわからない。だが、デスゲーム脱出のためにいち早く行動した事実には変わらないだろう。

デスゲーム脱出の方法は、現実世界からの救援ともう一つ、ゲームクリアがあるのだから。

「なら……俺もだ……いつまでもこんなところに留まつてられるか！」

「ま、待て！ 僕も一緒に……っ」

一人より二人。二人より三人と、最初に声をあげた男を中心に勇気を振り絞って声をあげていくプレイヤーたち。

計六人。彼らは震える足で街の外へと歩いていった。

残ったのは、重苦しい静寂である。

その静寂の中、シヴァには二つの選択が生まれていた。

一つは、これまで通り救援を待つこと。

もう一つは、強さを求めて微かな希望を頼りに、電子の怪物ひしめく街の外へ旅立つこと。

後者を潔く決断する勇気がシヴァにはなかったが、前者のままですたしていいのかと訴えかける自分もいる。

悩みに悩み続けて、シヴァはこの災厄を招いた茅場晶彦の言葉を思い出す。

——これはゲームであっても、遊びではない。

つまり、裏を返せば、それは、遊びではないがゲームであるということだ。

この世界をゲームだとし、クリアというゴールがあるならば。

クリアまでの道標が確実に、隠されているはずである。

だからこそ。

自分の強さを磨き、装備を揃え、道具を確保し、情報を集め、逃走を惜しまず、闘争を恐れず、ただ目の前の課題を斬り伏せていけば、そう簡単に死ぬこともないのだろう。どのゲームでもそうだ。自分がレベル1とはいえ、最初の敵に敗れることはまずない。

ソードアート・オンラインは現実ではない。

いきなりドラゴンが襲いかかってくる理不尽もありません。

まず自らに立ち塞がるは、弱い自分におあつらえむきの、弱い敵。

ご都合主義とも言えるそれは、過酷なる世界からの親切だ。

「……………」

彼は無言のままに立ち上がる。

戦うと心に決めたのだ。

恐怖はある。現に手は震えている。だがその恐怖すら飼い慣らそう。

そう、やるならば——徹底的にだ。

◇◇◇

彼は一人草原へと駆け出した。

一人なのは、レベルアップの効率を少しでも上げるためだ。

まず一人でモンスターと戦い、無理があるならば街へ戻ってしまえばいい。

大切なのは、見極めること。逃走を惜しまず、闘争を恐れないことだ。

彼は数多くある武器種の中で、一番手に馴染んだ細剣レイピアを選んだ。

腰の鞘に納まるは、その細剣のもつとも初歩的なものの、『スモールレイピア』である。

そして少ない所持金をはたいて購入した、円ラウンドシールド盾。

設定上木と革で作られたそれは、ステータスで言えば少しばかり敏捷性A G Iが下がるものの、生命力V I Tが格段に上がる。

生命力とはこの際、防御力と言ってもいい。

両手剣や両手斧などの両手武器は盾を装備できない。攻撃力ではそれらに劣る片手

武器の特権だ。

片手武器使用者のなかには、敏捷性重視か格好を意識して盾を装備しない者もいるらしいが。

彼にはそんなプライドを持って戦い続ける度胸はなかった。

さて、彼は一番手頃なモンスターを見つけると、遠巻きに様子を伺った。

モンスターを一言で表すならば、青い猪。

むしろそれ以外の表現が見つからないほどに、青い猪であった。

あの青い猪は、確かこのソードアート・オンラインで最弱クラスのモンスターであったはずだ。

青い猪は今一匹である。好機。

彼は気づかれないよう、慎重に後ろから盾を掲げ、細剣構えて忍び寄った。

十分に距離を狭めたと判断すると、彼は次にモーシオンを取る。

振り返るな、そう念じながら自らの細剣に光が宿っていくのを感じた。

ふう、と体が押し出されるような感覚。

細剣の鋒は青い猪の体躯に突き刺さり、細剣カテゴリのすべてのソードスキルの祖、『リニアー』を発動させた。

「プギルアアアアアア!!」

「……………っ!」

青い猪の絶叫がこだまし、彼の内から形容しがたい熱が溢れ出す。

生来のものか、そう感じるようプログラミングされているのか。

興奮と恐怖。シヴァはそれ存分に味わう。

青い猪は自身の命そのものであるHPを4分の1あたりまで減らし、表示される色も赤く変えていた。

これが野生動物ならば、まず間違いないで逃げていたことだろうが、生憎目の前の猪は電子の怪物だ。

作り出された本能に従いプレイヤーを轢き殺そうとする。そこに一切の死への恐怖はない。そうプログラミングされてはいないからだ。

彼は青い猪の敵意を確かに感じ取りながら、全力で後退した。

威力の高い技を命中させれば、一旦離脱すると相場が決まっている。

「ふうーっ……」

「ギュルルル……」

恐怖が勇気を呑み込んでしまわないよう、深呼吸。

もう一度ソードスキルを命中させれば確実に。そうでなくともあと数撃で相手は墮ちる。

ましてやこれは最弱の敵。恐れることはないはずだ。

青い猪の目と、彼の目が合う。

「プギルアアアアアア!!」

「っ!？」

刹那、こちらに向かって突進する青い猪。

彼は隙を突いて一撃浴びせようとしていたが、慌てて回避した。ぶるぶると手が震え、足はがくがくとおぼつかない。

恐れることはない。だが人間は、もしもを考える生物である。

——恐怖が勇気に勝ってしまった!

「ギルウアア!」

「くっ……………」

またもや突進。それ再度回避する。

体の震えのせいだろうか、先程よりも無様とさえ言えた。

「く、くそっ…………、クソクソクソクソクソクソッ!」

罵詈雑言を吐いて己の体を叱咤するが、やはり足は震えたままだ。

そして彼がどんな状況にあっても、モンスターは攻撃の手を緩めない。

三度目の突進を、彼は転げるようにして避けた。

「なんてことだ…………笑えない…………俺はこんなことをするために、ここへ来たんじゃない」

いぞ……」

ぼそりと呟いて、青い猪を見る。

そう、少なくとも彼はあのようなモンスターに死を感じ、愚かにも逃げ回るためにソードアート・オンラインの世界へと足を踏み入れたのではない。

最弱のモンスターに、自分は命を散らすのか。

それを考えたとき、湧き上がってきたのは恐怖でも興奮でもなかった。

怒りである。

「そうだ……。なぜお前如きに俺が怯えて逃げ回らなくちやいけない？ お前は最

弱のモンスターで、倒されて然るべき相手だ」

「ギユウウウ……」

「俺が怖いのは死だ。間違つてもお前じゃない。お前如きが俺を殺すなんて、認める

か！」

「ギユラアアアアア!!」

猪が四度目の突進を行う。それに対し、彼は一切の逃げの選択肢を捨てる。

代わりに盾をゆつくりと掲げた。

迫る猪。

その額に——盾を思い切り振り下ろした！

「ギユアアアアア!!」

「ぐ、う、おおお……!」

シヴァが猪もろとも倒れる。

命の具体化であるHPが数ドット削られる。

代わりに彼は、猪を抑え込んだ。

盾の下でもがく猪を歯を食いしばりながら押さえつけ、細剣を逆手に持ち変える。

「死ね——!」

「ギユアツ!」

ドズリ、と細剣が青い猪の片目に突き刺さる。

盾の下で悲痛な吠え声が上がった。

気にすることなく、もう一度、もう一度。

もう一度。

「ギユアアアアアアアアア……」

HPをすべて削り取られて、青い猪は断末魔を上げて消え去った。

盾の下の感触は一切消え、もうこの世界にたつた今死闘を繰り返した相手の存在を示

すものは何一つ残っていない。

あるとすれば、この瞬間に得た経験値だろうか。

彼はどさりと座り込むと、深呼吸をした。

熱は未だ引かず、勝利の余韻はあまり実感できない。なにせ最初の敵だ。これが倒せないようでは、論外。

ただ、安心がシヴァには訪れていた。

「……………ん？」

シュワン、と背後で音がした。

振り返ると、青い光とともに現れた、さつきとまったく同じ、青い猪。

猪は自分がたつた今この世界に生まれ落ちたことも知らないような素振りです、これまでしてきたかのように草を食い出す。

ふ、と彼は口元の口角が上がるのを感じた。

考えてみれば、当たり前だ。これはゲームなのだから。

彼は、ゆっくりと剣を構えた。

第2話 悪魔名の騎士

このデスゲームが始まり、そして現実世界の救援もないうまま、一ヶ月が過ぎた。

この頃になると、生き残ったプレイヤーの3分の1あたりは、自ら動くことを決断していた。

それが果たして正しい選択だったのかは、微妙なところだ。

自ら動いた結果、約2000人のプレイヤーが死んでしまったこと、そして一ヶ月かかって第一層すらクリアしていないことを考えると。

だがその死者2000人は、きっと無駄ではあるまい。

その2000人をもってして、自ら動くことを決めたプレイヤーたちは、より一層の慎重さで行動するようになったのだから。

「ふう……………」

シヴァはメインメニューを開いて自分の現状を確認しながら、物憂げにため息をついた。

自ら動くことを決めたプレイヤーの内、ハイレベルのプレイヤーはどうかやら《攻略組》と呼ばれているらしい。

ならば自分が攻略組なのかと問われれば、一步足りない。

レベル的に言えば、攻略組のレベルが10から12だ。

それに比べシヴァのレベルは9。それも昨日レベルアップしたばかり。

「慎重が過ぎたか……？」

装備にしても、盾や鎧を優先的に生産、購入してきたからか、武器は初期細剣の『スモールレイピア』をいくらか強化しただけ。

回復アイテムにも金を賭ける割合が多い。だからと言う訳ではないが、最近強化でさえ上手いかないようになってきていた。

お陰で死を身近に感じる回数は随分と減っていたが、モンスター一体あたりを倒すのに、時間がかかる。

即ち、経験値を稼ぐのが遅れているのだ。

いやいや、経験値より命。自らを強くする経験値は魅力的だが、命あつての物種だ。死ねばすべてが無駄。

「それよりは……良いはずだ」

「おーい、その君」

言い訳がましく呟くシヴァに、男の声がかかる。

声の方を向けば、青を基調とした上等な装備に身を包んだ男のプレイヤー。恐らくは

攻略組だろう。

何より驚くべきは、その男の髪色。装備と同じような、青色である。

髪色が青いというのは、これまでの人類ではいかなかったはずだ。つまり、自分は新たな人類を発見したことになる。ノーベル賞をもらえやしないだろうか。

と、冗談は置いておいて男の髪色は単純にそういうアイテムを使ったのだろうか。

彼は見たことがなかったが、攻略組であれば自分の知らぬアイテムの一つや二つ、保有していてもおかしくはない。

「俺か……?」

「そう、君だ。日本人にしては珍しい髪色だと思つてね」

そう言つて男はシヴァ髪を指して、次いで自分の髪を指した。

「君も俺と同じタチかい?」

「……いいや? これは地毛だ」

「へえ! 凄じやないかそれは!」

青髪の男は大仰に驚く。

シヴァは男の第一印象を、髪色に拘る男、にした。

「クオーターなんだよ」

「どこの国なんだい? アメリカ? ロシア?」

「イギリス」

「なるほど、道理で顔が整ってる訳だ」

「イケメンに笑顔で言われると腹立つな」

言葉とは裏腹に、シヴァは青髪の男との会話を楽しんでいた。

そういえば、装備やアイテムの交渉以外で人と話したのはいつぶりだっただろうか。

青髪男は自然な足取りで、シヴァが座っているベンチの隣へと腰を下ろす。それをシヴァが不快に思うこともなかった。

「俺はディアベル。君は？」

「シヴァ。……ディアベル、とは物騒な名前だな。悪魔って意味だろう、それ」

「ハハ、バレたか。気持ち的には騎士ナイトをやっているんだけどね」

「ならなぜそんな名前に？」

「『なりたい自分』と、『なるべき自分』は違うものさ」

「……………」

シヴァにはディアベルの言葉の真意はわからなかったが、彼はそれ以上踏み込まないことにする。

「……で、その騎士様が俺に何の用なんだ」

「言ったら。君の髪色が目立ってたんだ」

「なるほど。俺は髪色マニアに目をつけられた訳か」

「人に変なレッテルを貼らないでくれ……」

笑顔を保っていたディアベルも、さすがにやめてくれと言わんばかりに顔をしかめた。

「何も髪色に限らない。見た目の一つに目立つものがあればいいのさ」

「何の話だ？」

「人を纏めるに役立つって話さ。それだけで印象深いからね」

「……………あー、もしかして、攻略組のリーダー様か？」

「まだ、違う。でもいざずれ、そうなるうと思ってるよ」

変わらぬ笑顔で、変わらぬ口調で、とんでもないこと言う。

この状況下のリーダーとは、命を預けるに値すると信頼される者のことだ。とても並の精神力で務まるものではない。

「本当に……………何の用だ」

「目立つプレイヤーがため息を吐いていたら、誰だつて気になるだろう？」

少し警戒見せるシヴァに、ディアベルはあつけらかんと答えた。

「さて本題だ。君は何かお困りの様子。場合によっては手助けできる」

「……………そんなことをして、何のメリットが……………」

「大衆の信頼もまずは一から、だろうか？」

「……………」

片目を瞑り、茶目つ気たつぷりに言う。

シヴァは喉の奥で、小さく唸った。

◇◇◇

「ふむ……。それで、武器の火力不足が悩みの元だと」

「ああ」

ディアベルの確認に、シヴァが頷く。

結局、彼はディアベルの協力を仰ぐことになったのは言わずともわかるであろう。

ディアベルはシヴァの腰の鞘を見た。

「細剣か……。俺は本業じゃないけど、仲間が使ってたな」

「仲間？ パーティーを組んでいるのか」

「そうだ。気のいい奴らだよ。彼らと俺は訳あって、今は別行動をしているんだけどね」

ハハハ、と笑いながらディアベルは仲間たちのことを語る。

仲が深いのは簡単に見て取れた。

ソロであるシヴァにとっては羨ましい限りだ。その内パーティーを組むのもアリかもしれない。

「それで細剣の話に戻るが、確かホルンカの森で狩れるモンスターのドロップする素材を使って、中々の性能の細剣が作れた筈だ」

「ホルンカの森……」

地名は知っていた。

あそこで白い毛並みの猪を狩ったこともある。

「しつかり強化していれば、よほど不運じゃない限り3層までは充分通じるはずさ」

「3層……。それを知ってるってことは、ディアベルはベータテスターだったのか」

「……………いや、情報屋から知ったんだ。『鼠のアルゴ』、彼女はベータテスターみたいだしね」

「……………情報屋。そういう手合いもいるのか」

シヴァは頭の中にメモしておく。

『鼠のアルゴ』のことは知らなかったが、早くも異名がつくほどの人物ならこの先知り合うこともあるかもしれない。

もちろん、生き延びてこそだが。

「すまない、助かった。この恩は、いつか必ず返そう」

「……んん？ 何終わった気でいるんだい。俺は今手隙なんだ、手伝うよ」

「………ありがたい、が。さすがにそこまで世話してもらおうのは」

「何、恩の押し売りさ。もし俺が攻略組のリーダーになったら、存分に助けてくれればいい」

そう笑いながら言うと、ディアアベルはシヴァを追い越して先に歩き始めた。

「じゃあ行くかうか。いざ、ホルンカだ」

第3話 離別

「あれが素材を落とすモンスターか？」

「ああ。名前はラージペネント」

シヴァとディアベルの二人は、ホルンカの森内部にて息を潜めていた。

視線の先にいるのは、奇形の植物のようなモンスター。

頭部には毒々しい花が咲き、太い幹から左右に生える蔦はあたかも腕のよう。根の部分はどうかやら足の機能を持っているらしく、それでモンスターは歩いていた。

なにより目を引くのは、幹の部分にあるとつてつけたような口である。

花のバケモノ。夜道で遭遇すれば真っ先に逃げ出すであろう醜いモンスター。

それが、今回の獲物であるラージペネントだった。

「なんというか……グロテスク？」

「同感だ。俺も慣れるまでおっかなびつきくり戦っていたよ」

あの口が迫ってくるとそれはもう、と冗談めかして怖がらせるようにディアベルはつけ加える。

シヴァはその光景を鮮明に想像し、思わず眉をひそめた。

「あ、あいつらはだいたいが花を頭につけてるが、ごく稀に『実』をつけていることがあるんだ」

「実？」

「そう、赤い実。それを誤って割ってしまうと、花付きのラージペネットがわんさか集まってくる。だから実付きには極力手を出さないでくれ」

「ああ、わかった」

心得たという意思表示にシヴァが頷く。

それからシヴァは、隠れていた木陰から身を乗り出した。

盾を構えながら、ゆっくりと身近なラージペネットへと歩いていく。

後ろではディアベルが無言でこちらを見守っていた。お手並み拝見、ということか。

本来、これは自分一人で行うべきことだ。文句があろうはずもない。

びくり、とラージペネットが反応した。

シヴァの方へと振り返り、醜い大口を開けて威嚇する。

「シューウウウウウ!!」

不快な声をあげてラージペネットは敵意を露にした。

バレた。その事実を受け止め、だが最初の頃のように焦りはしない。

シヴァは素敵スキルを重点的に上げていた。隠密スキルの熟練度が足らず接近が見

つかったとて、想定内。

大事なものは観察と、次の一手の選択だ。

逃走を惜しまない覚悟で、闘争する。

「シユアアアアアア！」

「……………！」

ラージペネントが攻撃を仕掛けてくる。

どうやらこの種のモンスターは移動速度が遅いのに比べて、攻撃速度は速いようだ。

腕代わりの蔦を、シヴァへと振るう。

風切り音を伴って迫ったそれは、しかし盾を斬り裂くことはできずに弾かれた。

もう一本の蔦も続いて振るうが、これもやはり盾によって防がれる。

両方の蔦を振るったラージペネントに訪れる一瞬の硬直。それをシヴァが見逃すはずもない。

盾の防御の内側でソードスキルの構えを取り、剣に光を纏わせる。

「シッ！」

短い声と共に、シヴァはソードスキル・リニアをラージペネントへと突き込んだ。

「キシヤアアアアアア!!！」

「……………ふん」

手応えあり。

放ったソードスキルは確実にその仕事をこなし、花の怪物のHPを赤く彩らせた。悶えるラージペネントをよそに、彼は続いて連撃を加える。

ただの通常攻撃だが、止めを刺すには充分だ。

ラージペネントはまたもや悲鳴をあげ、そして硬直してから無数のポリゴン片へと姿を変えた。

すぐさま自らに振り込まれる経験値と、少ないc o l_金。それを視界の端で確認しながら、シヴァはディアアベルの方を向いた。

「や、見事だ。君は盾の扱い方が上手いね」

「攻略組リーダー志望にそう評価されるとは驚きだ」

「ハハ、嘘じゃないよ。……よし、俺も負けてらんないな」

ディアアベルがそう言うと、一足に別のラージペネントへと距離を詰める。

ラージペネントは突然の外敵の襲来にシステムが追いついていないのか、ほんの一瞬だけ動きを止める。

その間ディアアベルは片手剣に青い光を纏わせ、ソードスキルを叩き込んだ。

「シヤアアアアア……」

一撃であった。

シヴァが分析と防御で隙を伺う後の先のスタイルであれば、ディアベルのそれは高い攻撃力からの先手必勝だ。

砕け散る光の粒子を背景に、ディアベルが挑発するようにニヤリと笑った。

——いいだろう。

「シツツ！」

柄にもなく、シヴァはラージペネントへと奇襲を仕掛ける。

ソードスキルと連撃を組み合わせ、瞬く間に消滅させた。

「おおっ！」

ディアベルがまた別のラージペネントを一撃で倒す。

シヴァとディアベル目が合った。

シヴァが倒す。

ディアベルが倒す。

シヴァが倒す。

ディアベルが倒す。

シヴァが——

二人はあたかも競い合うように、ラージペネントを狩り続けた。

気がつけば——……

「いなくなった、なあ」

「そうだな。……あ、いつの間にかレベルアップしてる」

森にひしめいていたラージベネントはその姿を消し、シヴァはレベルアップまで果たしていた。

「そういえば、そのドロップする素材の名前は？」

「あ、そうだそうだ。言い忘れてたか。『食人花の蔦』というアイテムでね。五、六体に一体ドロップするちよつとしたレアアイテムなんだが……」

そう言いながらディアベルがメニユーを開いて戦果を確認する。

シヴァもそれに習ってメニユーのアイテム欄を確認した。

「……あつたぞ。27個ある」

「俺はちようど30だ。確か生産のための数は60必要だから……」
残り三つか、シヴァの眩きに二人は苦笑した。

これでは新たにラージベネントを探すか、ポップするのを待つしかない。
ゲームでは、よくあることだった。

◇◇◇

それからひとしきりラージベネントを狩り終わり、二人は街へと戻った。

一目散に鍛冶屋へと駆け込み、必要分のC O Oと素材をNPCに渡して細剣の作成を依頼する。

「ほら、完成したぜ」

NPCのNPCらしからぬ流暢な言葉と共に、新たな細剣がシヴァへと渡された。

「おお……」

感嘆の声を上げてシヴァは細剣を見る。

細剣特有の鋭い刀身は薄く鮮やかに緑がかり、柄の部分にはまるで巻き付くように植物の蔦のレリーフが精緻に施されていた。

スモールレイピアとは違う確かな手応えと重さは、武器のランクと要求度を顕著に物語っている。

武器の銘は『フィユサーブル』。

彼はそれをしっかりと鞘に納めた。

「おめでどう、シヴァ」

「ありがとう。お前のおかげだ」

シヴァはディアアベルへと深く礼をする。

ディアアベルはなんでもないと言うように「頭を上げてくれ」と言った。

「少し……広場に行かないか、シヴァ」

「…………？ ああ、いいが…………」

二人は鍛冶屋を出て、広場に向かい歩き出す。空はすっかり夕暮れ模様だ。

広場に着くと、ディアベルはシヴァへと向き直る。

その表情に笑顔はなく、真剣な面持ちだった。

「俺は攻略組のリーダーになりたいと言ったけど、実は実現までもうすぐなんだ」

「…………！ そう、なのか」

「ああ。こうやって実力者のプレイヤーを助けて周り、基盤はしっかりと作ってある」
そして、とディアベルは続けた。

「三日後、俺はツールバーナで第一層攻略会議を主催する」

「…………第一層、攻略…………!?!」

「ああ。俺たちのパーティーは迷宮区を探索し、次の層へと繋がるボスの間まで発見した。あと一步で、俺たちはインクラウド最下層を脱出できるんだ」

それは本来来るべき未来のはずだった。だがシヴァには、どこか現実感なく感じられた。

「第一層をクリアできれば、攻略組以外のプレイヤーも積極的にゲームクリアを目指すだろう。『ゲームクリアは不可能じゃない』、希望が現れる訳だからな」

だからこそ敗ける訳にはいかない。ディアベルはそう語った。
シヴァは納得する。

この男の『なりたい自分』とは『ディアベル』の名に込められた何かで、『なるべき自分』とは攻略組のリーダーという、全プレイヤーの希望なのだ。

「俺の見立てでは……約50人集まるはずだ。そこでどうだろう、君もその一人にならないか？」

「俺、が……？」

「そうだ。君のレベルと技術は、決して攻略組に劣るものではない。きっと、共に戦い皆に希望をもたらすことができる存在になれるはずだ」

ディアベルの視線がシヴァを射抜いた。

シヴァは己の腰にある細剣を見る。

「強制はしない。恩も感じなくていい。命が掛かっているんだ、当たり前だ。俺は君の意思を尊重する」

「俺、は……」

シヴァは一度視線を切り、もう一度ディアベルを見た。

歯を食いしばり、固く拳を握りしめる。

「すま、ない。ディアベル……、俺は、どうしようもない臆病な奴なんだ……。俺は、

第1層攻略には、参加できない……」

「……………そうか」

息をもらすように、ディアベルは呟いた。

その表情は、残念そうに笑っている。

自分の臆病さをシヴァは心の底から呪った。

ディアベルは一度瞼を閉じると、一転、なんでもないことのように笑う。

「そんな顔をするなシヴァ！ 君が攻略に参加しないからと言って、今日のことを消える訳じゃない。俺と君はもう友達だ！」

「友達……………」

「ん？ 違うのかい？」

朗らかな笑顔。シヴァに熱いものが込み上げてきた。

この騎士は、自分を友達と言ってくれたのだ。
ならば。

シヴァはしっかりとディアベルを見据え、言った。

「今は、無理でも。絶対にいつか、お前を支えるプレイヤーになってみせる」

「……………ふっ」

ディアベルが微笑み、拳を前に出す。

シヴァはその意を汲み、ディアベルの拳に自分の拳を合わせた。

「勝利を、信じている。あなたなら、できるはずだ」

「……ああ。第2層で待ってる」

拳を離し、二人は別々の方角歩き出す。

太陽なき夕日は、平等に二人を照らしていた。

シヴァは、決意を新たにす。

『なりたい自分』は、ディアベルのような希望である。

『なるべき自分』は、希望である彼を支える剣士であった。

第4話 眠れる森の美女？

「ガアアアア!!」

「おおおおおー!」

コボルトの斧とシヴァの細剣が激突し、斧を跳ね除けて細剣がコボルトを貫いた。

コボルトのHPは全損し、光の粒子となってこの世界から消え失せる。

ディアベルと別れてから三日目。

今頃ディアベルは、第一層攻略会議を行っているのだろう。

第2層で待つと、ディアベルは言ってくれた。

シヴァにとって『なるべき自分』は、そんな彼を支えるプレイヤーだ。

ならば、シヴァは実力を上げなければならない。

夜通し戦った結果、現在のレベルは12。

攻略組に匹敵するものであったが、シヴァはその程度で満足しない。いざとなればディアベルを体を貼って守ることができるほど、強くならなければ。

これが仮に、『忠誠心』というものであれば、思いの外悪い気分ではなかった。

ディアベルの助力を得て作成した武器、『フィユサブル』も手に馴染んできたころ

だ。

強化も一度行い、さらにその攻撃力を増している。

着実にシヴァは、強くなっていた。

「と、そろそろ休憩か」

疲労が溜まりにくい世界とはいえ、疲労がないわけではない。

限界を予測できない点で言えば、この世界の方が遥かに難儀である。こまめな休憩は必須であった。

比較的モンスターが出現しなさそうな場所を選び、腰を下ろす。

索敵スキルは重点的に上げている。うたた寝でもしなければ、モンスターの接近に気づけないということはまずない。

指をくいと動かし、メニューを開いて手の内に固焼きパンを出現させる。

はぐり。

豪快に噛みつき、喰いちぎる。

「これほど固くしなくていいだろう、茅場晶彦……」

いつもながらに固いパンに不平を漏らす。

どこかで聞いたことがあるが、なにやらNPCのクエストでクリームを手に入れられるものがあるらしい。

もっぱらパンにそれを塗って食べるのだそうなの。

詳しく聞いておけばよかった、と今更ながらにシヴァは後悔した。

「さて、と」

残りのパンを食べ終え、彼は腰を上げた。土埃などつくはずもないのに、つい癖でズボンを押く。

レベル上げを再開しようと、再びシヴァは木々の生い茂る森の中へと入っていった。

◇◇◇

「ギャツ!?!」

「ギーー!」

「グウツ!?!」

斬る。殴る。貫く。

そのようにして、コボルトの群れは制圧された。

シヴァは細剣を鞘に戻し、また歩き始める。

度々現れるモンスターをすべてポリゴン片に変えながら、さらに森の奥へ。

枝を手で払いながら進んでいくと、開けた場所に出た。

「……………」

そこは、幻想的な場所であった。

木が少ないからか光が集まったようにあたりを照らし、地面には色とりどりの花が咲き乱れている。

景色を色付ける蝶は気ままに舞い、中央より少しずれた場所に一本だけ木が立っていた。

「……………」

その木を見て、驚く。

木を背もたれに座っている人影があつたからだ。

NPCだろうか？ いや、カーソル表示からしてプレイヤーだ。

花畑の中に入り、シヴァはプレイヤーへと近づく。

そのプレイヤーは、女だった。

茶髪の毛先の別れたボブヘアに、白い肌。

睫毛が長い切れ長の目。

鼻筋はすつきりと通って、顎は小さく尖り、中性的に整っている。

背は女性にしては高く、不思議な大人びた雰囲気があつた。

その女プレイヤーは、あろうことか木に寄りかかり瞼を閉じて、頭をガクリと下ろし、

つまりは眠っていた。

一応は警戒しているつもりなのか、右手には短剣が握られている。

装備も短剣使いの特徴である敏捷性を重視した軽装。

「……馬鹿なのか？」

シヴァが呟くのも無理はない。

軽装ならなおさら、こんなところで眠っていてはいけないのだ。モンスターに襲われれば、ひとたまりもない。

——というかここがどこかわかっているのか。圏外だぞ。正気の沙汰じゃない。そう思いながら、シヴァは静かに寝息を立てる彼女へと手を伸ばす。

「おい、起きろ。ここは——」

ヒュン、と。

シヴァの頬のすぐ右を、白刃が通り抜けた。

目の前には、女プレイヤーの赤に近い色の瞳。

大の男に恐れすら抱かせる猛獣のような眼差しをしていた彼女は、目の前にいるのがプレイヤーだとわかるとすぐに表情を緩めた。

「……………プレイヤーだったか。すまないね、モンスターが襲ってきたのかと思ったよ」

「……………」

女プレイヤーが立ち上がり、片手でくるりと短剣を回して小振りの鞆に叩き込む。

対してシヴァは、右頬を恐る恐る指でなぞった。

久しぶりに感じる、死の横切る感覚であった。

「カーソルは……グリーンか。私に何もしていないようだね」

「……当たり前だ。圏外で寝ている奴がいれば、誰だつて起こしに来る」

「そうかい、ありがとう。君の善意、ありがたく受け取るよ」

まるで物語の登場人物のような、奇妙な喋り方をする女だった。

普通ならば首を傾げている頃だろうが、彼女のどこかミステリアスな雰囲気と似合っていて、妙に様になっている。

「とにかく」とシヴァはため息とともに言った。

「起きたならそれでいい」

そう言つて、彼はまた木々の中へと戻つていく。

正直、もう関わりたくはなかった。

いくら容姿が整っているからと言つて、まったく初対面の人間に勘違いで短剣を刺しにくる女など、だれが関わりたいと思うだろうか。

ざくざく。てくてく。

ざくざく。てくてく。

足音が、二つ。

「なぜついてくる!?!」

勢いよく振り返ったシヴァの目に映ったのは、短剣をくるくる回しながら歩く女だった。

女は自らを示すように、左手を自身の豊かな胸元に置いた。

「私はこう見えても、恩を大切にするんだ」

「恩になつていないだろうが！ 自分で起きたんだから！」

「じゃあ、お詫びかな。いきなり短剣を向けてしまったお詫び」

シヴァはつとめて冷静になるよう、深呼吸をする。

一度目を閉じ、また彼女に目を向けた。

「じゃあそのお詫びに、ひとつだけ、質問に答えろ」

「ん、なんでも答えよう」

「なぜあんな場所で寝ていた」

「安全地帯だったからね」

「安全性は保証されていない。寝るなら寝るで、街まで戻ればいいじゃないか」

「レベル上げの効率が悪くなるだろ？」

「……………」

当然のことのように言い放つ女に、シヴァは言葉を失う。

頭痛を抑えるようにこめかみに指を当て、「いつからこの森にいるんだ？」と聞いた。

女は形のいい顎に細い指を当てて、考える素振りを見せる。

「三……四日くらいかな?」

「おへ」

衝撃的な答えにシヴァが思わずつつこむ。

何かな? とでも言いたげな表情をする女に、シヴァが諦めたように背を向けた。

「君は死に急いでいる。こんな状況だ、正常な思考から外れることもあるかも知れないが、死ぬのは駄目だ。誰かとパーティーを組むといい。死に急ぐことはなくなる」

それだけ言つて、彼は立ち去ろうとする。

助言はした。この後どういう行動をとるのかは、彼女次第だ。

だが――

ピコン、とメニューに知らせが届く。

見れば、それは『パーティー申請』。

反射的に背後を振り返った。

そこには短剣をくるくる回しながら、にやりと笑っている女。

「君が言つたんじゃないか。パーティーを組めつて」

「……俺と組めという訳じゃない」

「私はソロだ。君もソロだ。『ぼっち』同士にはびつたりだろ?」

「……………」

シヴァが一度女から視線を切り、メニューを見る。

確かにパーティーを組めと言ったのは自分だ。

ソロではいずれ限界が来るのもわかっている。

彼は小さく呻き、ついに承諾のボタンを押しした。

パーティー結成の証に、自身の視界の端に映るHPバーが、もう一本追加される。

バーの横に記されたプレイヤー名は、『ジャズ』。

「……………言っておくが、俺はぼっちじゃない」

「へえ、誰かと組んだことが？」

「パーティーじゃないが、一緒に戦ったプレイヤーがいる」

「でも今は一人……フラれたのか」

「違う」

慰めるような表情をとる女に、シヴァは何度かぶりの苛立ちを覚える。

そんな彼を見てくすくす笑う女。

「冗談冗談。じゃあよろしく、シヴァ」

「……………ああ」

苦々しく、しかしシヴァは確かに頷いた。

第5話 死別

「スイッチー！」

「オーケー」

大型のコボルトの片手斧を盾で弾き飛ばし、シヴァはジャズと入れ替わる。

ジャズは瞬く間にコボルトの懐に入ると、短剣のソードスキルを容赦なく放つ。

激しい断末魔と共に、大型のコボルトは碎け散った。

シヴァとジャズが暫定的にパーティーを組んでから一日。

今頃ディアベルを筆頭とした攻略組が第一層ボスへと立ち向かっているはずだ。

彼らの成功を祈ると共に、シヴァはジャズとレベル上げを行っていた。

「いや、パーティーっていうのもいいね。今まで相手できなかったモンスターとも戦える」

「……………そうだな」

認めるのも癪だったが、ジャズの言葉は真実であった。

シヴァは攻略組と遜色ない実力を持ち、ジャズは無茶無謀（本人は画期的だと言っている）なレベル上げでステータスが高い。

二人で獲得経験値が分かれるが、挑めるようになった敵と消耗を抑えられる利点に比べれば安いものだった。

「……さて、昨日は街に戻ってぐっすり眠ったし、今日は徹夜——」

「阿呆か！」

シヴァがジャズをチョップで黙らせる。

この世界の規律たるカーディナルは、彼をオレンジプレイヤーにはしなかった。

「なにするんだ……。おかしいことは何も……」

「何のためにお前とパーティーを組むことになったと思ってる!？」

シヴァは深くため息をつく。

——どうもこの女と一緒にいれば、調子が狂う。

額に手を置き、「それに」と言った。

「今日は攻略組が第一層のボスの討伐を行っている。そろそろ、勝敗がつくころだろう」

「……………そうなの？」

「数日フィールドに出っぱなしだから知らんだ」

ジャズ意外にも深刻そうな表情をして、「さすがに流れに乗り遅れるのは……」などぶつぶつ呟いている。

レベルアップしか考えないからそうなるのだ。シヴァは心の中で言っちゃった。

「でも……方が一負けるといふことではないのかい？ ほら、最初のボスだし」

「彼らが負けるわけないだろう」

興味本位で問うジャズに、シヴァは何の確信があるのかはつきりと言う。

「彼らは、『騎士』に率いられた猛者達だぞ」

◇◇◇

速報！ 第一層が攻略される！

その知らせは、街中でビラをばら撒くフードのプレイヤーにより広まった。

ビラを手に取り、文字を見たプレイヤーたちは歓喜の声を上げる。

それまで重苦しい雰囲気だった始まりの街に、希望が宿った瞬間であった。

「ディアベル、やったのか……！」

「へえ、君の言う通りだったね。攻略組の被害も軽微、って書いてある」

表情に歓喜の色を宿すのは、シヴァも例に漏れない。

彼はビラ仕舞うと、一目散に転移門へと駆け出した。

敏捷性がシヴァよりも高いジャズが、ひよいと追いついてくる。

「おいおい、待ってくれよ」

「すまないが、俺は第二層……いや、攻略組に用があるんだ。お前も来るか？」

「いや、まだ遠慮しておくよ。私は美味しいレストランでも探しておこうかな」
走りながら会話し、あつという間に転移門、そして第二層へ。

「……………」

「ここが、第二層……………」

始まりの街とは街並みの違う主街区に、本当に第二層へと上がってきたのだという感覚が押し寄せる。

自分たちが転移門から最初に転移してきた訳ではないようで、周りには既に何人ものプレイヤーがあたりを散策していた。

「じゃあ、とりあえずここです」

「ああ」

ジャズと一旦別れ、自らは攻略組のもとへと走り出す。

「すまない、その君。攻略組がどこにいるか知らないか？」

「え、あ、私ですかっ!? あ、えーと、そういうえば強そうな人たちは向こうにいたよう
な……………」

「ありがとう」

小柄な茶髪の少女へと話を聞き、少女が指さした方向は、西。

シヴァは礼を言って再び走り出した。

しばらく走って目的地についたのだろう、ちらほらと第一層基準で高いスペックの武器を身につけるプレイヤーが見えてきた。

「ディアベルはどこだ……？」

周りを見渡し、青髪の男を探すが、姿はどこにも見当たらない。それに……。

——— ということだ……。皆、表情が優れていない。

シヴァの目に映る攻略組のプレイヤーは、誰も彼も、重苦しい雰囲気を漂わせていた。ゲームクリアの第一歩を踏み出したというのに、どういうことだろう。

「……仕方ない、聞くか」

ふいと視線を漂わせて、目に止まったプレイヤーへと近づく。

サボテンのようなトゲトゲとした茶髪が印象的の男だった。

「すまない」

「……お？ なんや、ワイか？ 見いひん顔やな」

「俺はシヴァだ」

「ほう。ワイはキバオウ。よろしゅう頼むわ」

「ああ、よろしく」

「……で、なんや。なんか用件あるんやろ？ ジブン」

「そうだ。『ディアベル』というプレイヤーはどこにいる？ 攻略組のリーダーをして
いた筈だ。知っているだろう」

「……………」

キバオウが驚愕の表情をとる。どうしたと言うのだろうか？

彼は一旦瞼を閉じると、努めて感情を押し殺すような顔で言った。

「なんや……………アンタ、ディアベルはんの知り合いかいな」

「ああ。武器の作成で助けてもらった」

「……………そうかい。でも、残念やったな。ディアベルはんは……………」

キバオウが、静かに呟く。

「……………死んでしまいはったわ」

「……………馬鹿な」

出てきた言葉は、それだけだった。

シヴァの言葉を否定するように、キバオウが頭を左右に振る。

「う、嘘、だろう……………」

「……………ホンマや。残念ながらな。黒鉄宮に確認しにいつてもええ……………」

「……………何故……………。彼のレベルが、足りなかったのか？ 装備が甘かったのか？ それ

とも、誰かの罠に……………」

「……………どれもちやう。ディアベルはんは強かった。指揮も完璧と言ってええくらい

やった」

「なら、どうして……………」

キバオウは歯を食いしばり、拳を握りしめて言う。

「二層のボスは四本のHPゲージが最後の一本になると、武器を曲刀の『タルワール』に持ち替える、そういう情報やった。ベータテスターからの情報や、実際ベータテストの時はそうやったんやろうな」

「やが」キバオウはそこで一度切る。

「実際に持ち替えたのはタルワールやなく……カタナの『野太刀』やった」

「……………」

「ソードスキルは武器種によつて大幅に異なるのはあんさんも知つとるやろ？ 曲刀

のソードスキルが来ると思つていたディアベルはんが、よもや見たこともないカタナの
ソードスキルになんていきなり対処できるはずがない。それで、不意を突かれて、

……………お終いや」

シヴァは攻略組のプレイヤーたちの面持ちの理由を思い知つた。

損害は軽微、ビラにはそう書かれていた。

確かに、第一層ボスの攻略が一人だけの犠牲で済んだことは、客観的に見れば軽微と
言えなくもないだろう。

何が軽微なものか……………！

失つた代償はあまりにも大きい。

第一層を通して全プレイヤーは希望を示され、攻略組はリーダーを失つた。

どうしてこれが、『軽微』と言えよう。

「俺は……………彼に攻略へ参加しないかと誘われていた。臆病な俺は、恐怖心が勝り……
断つてしまった。……………もし、俺が攻略へ参加していたのなら、彼は死なずに済んだのか

……………？」

もし、は何の意味もなさない。どう議論したとて、死人が生き返ることはない。そんなことは、わかっていた。

だが、どうしても聞かずにいられなかったのだ。

「……………いや、変わらんかったやろうな。あんはんがいても、他の誰がいても…………。誰も、反応できんかった」

変えられたとすれば、とキバオウは噛み締めるように呟く。

「ベータテスター、いや…………『ベーター』だけや」

「ベ……………ター…………？」

「せや。ベータテスターのチーターやから、ベーター。奴はベータテスト時、誰も上つたことのない階層まで上つたと、自分から言うてる。ワイは、奴がボスを取り出した野太刀を見ていち早く反応してたのを見た。奴は上の階層でカタナスキルを持つモンスターと散々戦ってきたから、そして『ボスがカタナへと持ち替える可能性』を考えてたから、唯一反応できたんや」

「やからまあ、その可能性を言つとれば話は違つたかもな」キバオウが悲しげに呟いた。

「そのベーターはその後、どうしたんだ…………？」

「それが滅茶苦茶強くてな。奴を中心として攻略組は戦い直した。プレイヤーの中心

にいた奴はボスに止めを刺し、L Aを獲得して先にこの階層をアクティベートしたんや」

二人の間に、しばらく会話はなかった。

何分か経って、シヴァが口を開く。

「……………そのビーターというプレイヤーは、どんな奴なんだ？」

「名前は確か……………『キリト』やったか。黒っぽい装備をした、片手剣^{ソード}使いや」

「……………すまなかった、ありがとう」

シヴァはキバオウにそれだけ告げると、その場を後にした。

頭の中で何度も、『キリト』という名前を反復して。

第6話 鼠のアルゴ

強引な体勢から構えを取り、無理やりソードスキルを発動させる。

細剣は光を帯び、牛のモンスターを砕いて脳天を貫き決る。

ポリゴン片へと変わって砕け散るモンスター。

回復系統のアイテムは残り少ない。HPは既にイエローゾーンに入った。

空は暗黒。夜である。

現実世界とは違い夜間であってもそれなりの視界は保っているが、それでも昼の明瞭さには劣る。

本来は圏内まで退くか、フィールドの安全地帯を探しそこで夜を明かすべきだった。

——知ったことか。

強くならなければならない。それがこの世界の条件だ。

あれだけ強く、賢明であった騎士でさえ、この世界の脅威を前に力尽きたのである。

彼を突き動かしていたのは、どす黒い何かであった。

恐怖とも言えよう。絶望とも言えよう。悲憤とも言えよう。

そして、復讐心とも言えるだろう。

誰に対してか。何に対してか。

彼は——……………

「おい、シヴァア！」

かけられた声に、ぼんやりとしていた意識が覚醒する。肩を引かれるままに振り向けば、赤い瞳と目が合った。

「……………ジャズか」

「探したよ、こんな時間まで何してる」

「レベル上げだ。お前ならわかるだろう」

平然と言うシヴァアにジャズは驚愕した。

ついこの前まで自分の無茶無謀を叱っていた彼と同じとは思えない。

それにシヴァアの瞳。淀んでいる、というのが正直な感想だった。

「私でもこんな夜中まで戦うことはしない。戦うなら早朝だ」

「そうか。なら今日は街へ帰ろう」

そう言うのと、シヴァアはジャズの手を振り払って街へ戻ろうとする。

そこで初めて彼は気づいた。街からここに至るまでの記憶がないのだ。

「……………街ならこつちだよ」

「そうか、すまないな」

シヴァがふらりとジャズの背を追う。

ジャズが歩く速さを落としたのか、いつしか彼と彼女はならんだ。

視線は前方から変えないままに、ぽつりとシヴァが言った。

「……俺はもう君の邪魔はしない。好きにレベル上げをするといい。パーティーも組むなら他のプレイヤーと組め」

「……………」

ジャズは訝しげな視線をシヴァに送る。シヴァは相変わらず、ぼうつと前を見つめたままだった。

「パーティーを組めと言ったのは君だ。自分の言葉くらい責任を持つたらどうだい？」

「責任……。俺はそれを果たすべきか？」

「多分ね」

「なら君の言う通り、パーティーは組んだままにしよう」

あまりの主体性のなさに、ジャズは奇妙な感覚を覚える。

彼は自分にパーティーを組めと言った。それは間違いなく、自分の命を案じてくれていたからだ。

それが今はどうだろう。彼は自分の命すら投げ出そうとしている。自暴自棄だ。

視線を困惑のものに変えて、シヴァを瞳に映す。

「一体……なにがあつた？」

ジャズの言葉はシヴァに届いたのか、初めてシヴァはジャズを向いた。

そしてあまりにも小さな声で、言ったのだ。

『『なるべき自分』を、失った』

◇◇◇

シヴァは強引に連れられるようにして、ジャズがとつた宿に泊まることになった。

部屋はベッドが一つ、丸テーブルが一つ、椅子が二つ。

豪華とは言えなかったが、過ごしやすい落ち着いた部屋だった。

「いいのか？ 同じ部屋に泊まらせて」

「ハラスメント防止コードがある。それに今の君の様子を見ていたら、心配はないよ」

「そうか。嫌になつたら言ってくれ、別の部屋をとる」

「どこももう埋まつてるよ」

「……………そうか」

そう言うと、シヴァは立ち上がりドアノブへと手をかけた。

「どこへ行く気だい？」

「外の空気を吸いに」

「さつきまでさんざん吸ってただろ?」

「……………大丈夫だ。街からは出ない」

言ったつきり、ジャズの制止も聞かず部屋を出て行ってしまった。

ジャズは追いかけてようとして、思い留まる。

何も追いかける理由はないはずだ。そもそも、ここまで世話を焼く理由も。

ジャズは不機嫌にベッドへと飛び込んだ。

◇◇◇

街の大通りとは外れた、薄暗い路地裏。そこをシヴァは歩いていた。

目的は場所ではない。人物であった。

「……………お前が、『鼠』か?」

「おや、こんな時間に珍しいナ。客力?」

シヴァの前方を歩いていたローブのプレイヤーが振り返る。

フードを目深に被っていて顔はよくわからないが、声から女であることはわかった。

「ああ、客だ。正確な情報を提供する情報屋を営むプレイヤーがいると聞いた。『鼠の

アルゴ』という名前で」

「当たり前だ。だが、オレッチの情報は高いぜ?」

「構わない。俺の有り金分なら、払える」

「ソウ生真面目に返されると調子狂うナ……。デ？ 何の情報が欲しい？」
シヴァはアルゴをしつかりと見据え、はつきりと言った。

「ビーター、キリトというプレイヤーの情報だ」

「……………」

アルゴの表情が変わった気がした。気がした、というのはフードの下の表情が読み取れないからだ。

「……………どうした？ お前ほどの情報屋なら既に知っているだろう。ビーターのことを」

「……………アア」

「幾らだ？」

「……………悪いガ、ソイツは教えらんないし売れないナ。アンタに教えちゃ、何をしでかすかわからナイ」

「……………」

「相当ヤバイ目をしてるヨ、アンタ」

彼の行動は速かった。

高いステータスに任せ一瞬で距離を詰め、アルゴのローブを掴んで壁際へと追い込む。

目を合わせ、もう一度言い聞かせるように言った。

「ビーターの情報を売れ」

「……オイオイ、せっかくゲームクリアの一步目を踏み出したっていうのにオレレンジ
プレイヤーになる気力？ それに、こんなことをしたってオレツチの意思は変わらない
イ。諦めるんだナ」

「……………」

どうしようもない、と判断したのかシヴァがぱつとアルゴのローブを離した。

アルゴが乱れたローブを直す。

シヴァは至って真面目な雰囲気、コインを数枚アルゴへと投げた。

「手荒な真似してすまなかった。それは迷惑料だ」

「謝るくらいなら初めから止んなヨ……」

さしもの鼠のアルゴも、シヴァのちぐはぐな態度に困惑を覚える。

シヴァはもう用はないと言うように、アルゴの横通り過ぎた。

数歩歩いて、思い出したようにアルゴを振り返る。

「お前の鼠のアルゴという名は、『なるべき自分』か？ それとも『なりたい自分』か

？」

「うーん……。ソイツは1000000だナ。どうすル？」

アルゴはしてやったりと笑った。

「……………やめておこう」

シヴァは諦めて、大通りへと戻っていった。

「フウ……。キリ坊、何したんだ……………」

アルゴはヤレヤレと首を振った。

あんまり一人の客に入れ込むのはよくないが、明日にでも忠告してやろう。さて、アルゴが自らも裏路地から姿を消そうとした、その時である。

「hey, その鼠のお嬢さん」

背後から声が聞こえた。

低く、よく通って、心を落ち着かせるような声だった。

振り返れば、闇に溶けるような色合いのポンチョを着たプレイヤー。

自分と同じくフード被り、顔はよく見えない。

——ヤレヤレ、今日はイヤな客が多いナ。

しかしせっかくの客を無下にするわけにもいかず、仕方なく応対する。
「なんダ？」

ポンチヨの男は、唯一伺える口元をにやりと歪めて言った。

「今の player のことを教えてくれ」

第7話 忍び寄る悪意

「やあ、おはよう。よく眠れたかい？」

「……………ああ」

シヴァに声をかけてきたのはジャズだった。

椅子に腰掛け、腕を組み、目だけをジャズに向けて応対する。

ジャズはもう一脚の椅子へと座り、丸テーブルへ肘を置いた。

「嘘だね。疲れた顔をしている」

「そうか？」

「そうさ」

「朝食は食べたかい？」

「まだだ」

「なら作ってあげよう」

そう言うと、ジャズは備え付けられた小さなキッチンへと足を運ぶ。

シヴァの別にいい、という言葉を遮ってジャズが言った。

「最近『料理スキル』なるものを取ってね。熟練度を上げるために付き合ってくれよ」

「……………意外だな。攻略には関係ないスキルを君が取るなんて」
シヴァが目をぼちくりとさせる。

レベル上げのために何日もフィールドへ出っぱなしだったプレイヤーが、攻略には関係のないスキルを取るとは思えなかったからだ。

「長い長いゲームクリアまでの生活だ。少なくとも……三年はかかるんじゃないかな？ 娯楽の手段の一つでも確保しておかないと、やってられないよ」

「……………ふむ」

そういうえば、彼女は無謀なレベル上げを敢行していたとは言え、ボス攻略には参加しなかった。

それは彼女が知らなかったからだ、情報の仕入れを怠るのは攻略を考えての行動とは思えない。

ジャズは攻略ではなく、もしかすれば本当の意味で『好きに生きている』のかも知れない。

「私のこのアバター名は私がジャズ音楽が好きだからなんだが、もう少しレベルが上がったら『音楽』のスキルも取ろうかと考えてる。君もどうだい？ バンドを組むとか」

「……………」

「ま、気乗りしないならそれでいいよ。君は心傷ようだし」

ジャズはキッチンでメニューウインドウを操り、材料を出した。シヴァがぼそりと、「現実世界では」と呟く。

「……ピアノをやっていた」

「へえ。クラシックかい？」

「練習はな。好きな曲を弾くことが多かった。ジャズも、弾けないことはないだろう」

「いいね。また今度、聴かせてほしいな」

「……スキルが必要なのだろうか？」

「音楽スキルは、楽器未経験者のためのものだよ。スキルの熟練度によって演奏できる曲が増えていき、スキル発動で勝手に体が動く。経験者はスキルがなくとも、実力があれば弾けるそうだよ」

「そうか」とシヴァはゆっくり頷いた。「……機会があればな」

ジャズはくすりと笑った。

朝食はサンドイッチだった。

◇◇◇

「夜風に当たってくる。少し遅くなるかもしれない」

レベル上げを終えて、宿に戻った、夜。

すぐにそんなことを言って、シヴァはふらりと部屋を出て行ってしまった。

ジャズにはそれを止める義務も権利もない。同じパーティーメンバーだからと、プライベートまで阻害するのは過ぎたることだ。

だが、彼が今非常に危ない状態であることは見て取れる。

何があつたのかは知らないが……。

それならばそれでジャズにも考えはある。

ジャズには彼を止める義務も権利もなくとも、情はあつた。

彼女は自らも宿を出て、街の中へと消えた。

◇◇◇

第一層の黒鉄宮の中にある巨大な『生命の碑』には、ソードアート・オンラインに参加したすべてのプレイヤーのアバター名が記されている。

生者の名前もあれば、もちろん死者の名も。

彼らを隔てるのは、名前の上に横線が入っているかどうかだ。

「……か……」

シヴァは冷たい金属の碑の文字列の前で、その名前を見つけた。

視線の先には『Delia beru』の文字。無慈悲にも、上から横線が引かれている。

生命の碑記された死は絶対である。それが覆うことはない。

ディアベルの死は、決定したのだ。

「……………」

シヴァには正直、なぜ彼の死をここまで引き摺っているのか自分のことながらによくわかつていなかった。

ディアベルには武器の作成を手伝ってもらった。だが、それだけだ。

死んだとて、悲しみこそすれなぜ慟哭にも似た感情を持つのか。

それがシヴァにはわからなかった。

……………いや。

彼だけがこのデスゲームをクリアに導けると、そう信じていたのだ。

そしてその彼を支えなければならない。使命にも似た何か、シヴァの『なるべき自分』を決定したのだ。

だがその彼はもういない。

『なるべき自分』を失ったシヴァは、どうすればいいのか……………

「酷いモンだよな。死んじまったプレイヤーの証明が、この生命の碑と俺らの頭の中にある記憶だけなんて」

声が、聞こえた。

低く、よく通って、心を落ち着かせる、そんな声だった。

声の方向を向けば、そこには黒のポンチョを纏ったプレイヤー。フードを被っていて顔はよく見えなかった。

怪しい出で立ちだったが、男の振る舞いか、声からか、警戒心なんてものは呼び起こされなかった。

「Hello, 墓参りかい？」

「多分……そうなる」

ポンチョの男がシヴァの横に立つ。不快に思うことはなかった。

「ハーフ……いやクォーターか。Englandと見た」

「よくわかったな。そういうお前は丸つきり外国人か」

「よくわかったな？」

「声質でな。それと……わざとらしい英語を混ぜた日本語」

「hahaha, こいつカンベンだ。ついクセでね」

ポンチョ男は陽気に言った。

その陽気さを鬱陶しいとは思えなかった。

「……浮かない顔だな？ ま、ここに来ていた時点でだいたい察しはつく」

「……………」

「こう言っちゃなんだが……俺も同じさ。アンタに話しかけた理由も、それでだ」

「……………そうか」

「少し話をしたいんだが、いいかね」

「……………好きにしろ」

「じゃ、遠慮なく」

ポンチョ男は先程の陽気さを幾らか落として語り始めた。

「このデスゲームが始まって以来、俺には相partner棒がいた。そりゃあ良い奴だったよ。

ある時、俺たち二人だけのパーティーにもう一人、仲間ができた。そいつは自分をベータテスターだと名乗り、俺や相棒にこのゲームのいろはを教えてくれた。優しい奴だったよ。俺と相棒は奴を信じ切っていた……………。

ある日、俺達とはあるクエストに出掛けた。なかなか良い片手剣が貰えるクエストだった。

相棒は片手剣だったし、そいつも片手剣だった。もちろん実入りのいいクエストは難易度も高い。それでも俺と相棒と、そしてもう一人の仲間がいれば切り抜けられると、そう思っていたよ」

ポンチョ男はそこで一旦話をきる。

まるで怒りを思い起こさせるように肩を揺らし、拳を握りしめ、声も幾分か荒々しくして話を再開させた。

「奴は……そのクエストをクリアさせるためにどうしたと思う？」

クエストについてろくに説明もせず、注意点も話さず、あまつさえ俺と相棒を『匣』に
しやがったんだ！」

びくりとシヴァが肩を揺らす。

ポンチョ男の見えぬ顔をシヴァが見た。

「俺と相棒は、無我夢中に戦ったよ。生きるためにな。でもモンスターの雪崩にはど
うしようもなかった。戦っている俺の耳に届いたのは、相棒の悲鳴と、ポリゴンの破碎
音。

……俺はすべてを理解した。

俺はその後、どうにかモンスターを切り抜け村まで戻った。奴は姿を消していた。

許せるか？ なあ？ 許せる訳がないだろう。相棒を殺し、自分だけの利益を追い求
めた奴のことなんて！」

「だから俺は」ポンチョ男が静かに呟く。「復讐することにした」

シヴァが目を見開く。

「……そう怖がるなよ。何も殺したわけじゃない。見ろ、俺のカーソルは green
だろ？」

俺はその後、どうにか奴を見つけ出した。俺は考えた。どうすればステータスも装備

も上のアイツに、復讐を成せるかをな。

そして俺は、『ある手段』で奴の装備を奪い去った。そしてそれをすべて奴の目の前で破壊してやったよ」

ポンチョ男が寂しげに笑った。

「奴は叫んでた。『何をするんだ』とか『弁償しろ』だとかな。

知るかよそんなもん。俺からすれば、『馬鹿じゃねえの?』の一言だ。

俺は慈悲を見せてやった。相棒を殺したんだ、本当は死ぬほど殺してやりたかったよ。でも俺は我慢した。コイツをこんな糞野郎にしたのはこの状況のせい、って無理矢理自分を納得させてな。

それでも奴は反省の色を見せなかった。

もう充分だ。もう我慢の限界だ。

このプレイヤ^犯ーはもはや俺達にとって害悪、そう判断した俺はさらなる『手段』を講じて奴をオレンジプレイヤ^罪ーにしてやった。

そうして奴は晴れて牢獄行き。それから俺は定期的にここへ墓参りへ来るって訳だ」
ポンチョ男は「ご静聴どうも」と冗談ほく言う。その冗談ですら、悲しげに聞こえた。
シヴァは言葉を失っていた。

あまりの悲劇にどう答えればいいのかわからず、沈黙を守っていた。

「まあ実はこの話には続きがあつてな。俺は事を終えた後、同じような悲惨な経験をしていない奴がいなかを探したんだ。

そしたら、程度は違えど数人、いた。しかもそのすべてが復讐を諦めて、泣き寝入りだ。

俺は到底その現状が許せなかつたもんでな。今じゃ俺は彼らに『復讐の手段』をレクチャーしてる。

殺さず、そしてあの糞野郎共を地獄へ叩き落とす手段をな」

思わず、視線をポンチョ男へと向けた。

危うく出そうになつた言葉を、シヴァは慌てて抑え込む。

だがそんなことはお構い無しに、ポンチョ男がシヴァへと目を向けた。

「お前も、俺達と一緒だろ?」

「……………!」

「そうビビらないでくれ。目を見ればわかるんだ。ゲームの理不尽さじゃなく、人の悪意で大切な人を失つた奴の目は、暗く、淀んでいる。まさしく今のアンタみたいにな」

ポンチョ男の言葉は雫のように心へと落ち、そしてシヴァを侵食する。

フード中で、ポンチョ男の瞳が暗く光つた。

「なあ、お前もどうだ? お前が望むなら、復讐を手伝つてやるよ。何度も言うが殺す

わけじゃない。お前が罪悪感に囚われる必要もない。もつと酷い事を、奴らはしているんだから」

「……………っ」

シヴァは答えるのを躊躇った。

ポンチヨ男が場を落ち着かせるようにふう、と息をする。

「……………まあ今すぐ決められることはできないよな。難しい判断だ。だがこれでも俺は暇じゃないからな。そうだな、三日待とう。それまでに答えを出しておいてくれ。Ye s か No か、どっちを選ぼうとアンタの自由だ」

そう言うとポンチヨ男はシヴァに背を向ける。

「じゃあな。三日後、また会おう。Goodbye」

ポンチヨ男は後ろ手に手を振り、そして闇に消えていった。生命の碑の前には、低く項垂れるシヴァだけが残っていた。